

# カタクリの変異いろいろ

櫻井幸枝

植物の奇形は、注意して観察していると結構見つけることができるものです。中でも「帯化」という奇形は、その原因はいろいろあり特定されないようですが、よく見られるものです。

キク科のマーガレットなどでは、帯化した茎の先端に付く頭花がぐにゃぐにゃと波打つ、異様な姿になるのを43号(2006)で報告していますが、この場合一つ一つの花(小花)の大きさはおそらく変化しておらず(確認したわけではないですが)、数が増えているのではないかと思います。また、おなじキク科でも、アキノノゲシの茎が帯化したものでは、帯化した中央の茎からさらに茎(小花柄)が出て、頭花の数が増えた姿になったものを見たことがあります。この時は帯化したのは中央の茎だけで、頭花の形には変化はないようでした。

タンポポ・マーガレットなどの、花茎状の茎があまり分枝しないで花をつけるものと、アキノノゲシなど、茎が分枝して花をつけるものとは、異なった変化がおこるのかもしれない。

カタクリの奇形の、いくつかの変化を目にする機会があったので、この場を借りて記録します。

通常6枚の花被片からなるカタクリの花ですが、花被片の数が増える奇形が見られるようで、花被片が7枚になったものが撮影されています(写真1~6:2007年4月22日 魚沼市大石 櫻井勝恵撮影)。またよく見ると、写真の個体では、花被片だけでなく雄蕊(雄しべ)も7本あるのです。

同じような変化が、1個体だけでなく数個体で、この一帯で見られたということで、写真も2個体(AとB)撮影されています。多くの個体にこのような奇形を引き起こす要因があったのでしょうか。または、固定された姿の可能性もありますが、その場合は毎年同じような奇形の花がつかはずですので、時間をかけての調査が必要になります。

また、1998年3月28日に弥彦山麓で撮影した一見とても重たげな印象のカタクリ(写真7・8)は、今になってよく写真を見てみると、花被片の数が7枚に変化している上、何枚かではその幅が大変広がっており、花2個分くらいの量ありそうでした。雄蕊は、写真でははっきり分かりませんが7本は数えることができます。

弥彦山の個体は比較的目につきやすいものでしたが、花被片が1本2本程度増えたくらいの変化では、近くまで

寄って見なければ気づかないと思われます。大きな群落などでさがせば、実は結構見つかるものなのかもしれません。



写真1 個体A(手前側)



写真2 個体A 雄蕊も7本



写真3 個体A



写真6 個体B



写真4 個体B



写真7 花被片7枚、幅が2倍



写真5 個体B



写真8 雄蕊も7本以上 (写真7と同じ個体)

カタクリの白花になったものが時々ニュースになります。一面ピンクのカタクリの中に白い花があると確かに目立ち、清楚な感じがより人をひきつけるのかもしれませんが。しかし、花被片数の変化のような地味な変化があることにも注目するようにして、じっくりと観察していきたいものです。